

E 自己暴露的である点で、ボクの音楽はMだ

ジム・ファイータス

コンピュータを超える人間ドラムマシンのメタルパーカッション・サウンドで過激派ロックのトップに立ったクールな自己分析家

C

オーバードグラウンドのロックが娯楽化すればするほど、アンダーグラウンドの非商業的ロックも増える。独立系レーベルの活動はメジャーを目ざしたがゆえに失敗したが、さらに過激でパーソナルな活動はますます盛んなようだ(ますますマス情報からは遠のくが)。ドイツのノイハウテン、イギリスのサイキック・TVなどが活躍する、そのアンダグラ・シーンに84年、デビュー作『ホウル』をひっさげ、突然ハレー彗星のごとく出現したのがジム・ファイータスだ。インダストリー・レーベル系のノイジーなメタル・パーカッション

にメロデーの起伏の少ない詞をのせたスタイル、といってしまうえばアンダグラでは特にめずらしくはないが、コンピュータのように速くジャストなリズムでありながら、到底コンピュータには作れない厚みとビートを持ったサウンドは各方面から注目されていた(日本では細野晴臣らが巨大)。

新アルバム『ネイル』を携えての初来日のステージは、やっと300人が立ち見できる程度のスーパードロフトで行なわれた。まず、彼の音楽にのって上映されるのが、リチャード・カーンのフィルム。喫茶店で口論し合う男女、突然女が男の目をアイスピックでメッタ突きにする……といったようなSM(SFではない)ホラー的な内容。続いて、金属バットを持って登場した彼は、カラオケに合わせて、彼の詞を歌い叫ぶ。娯楽を期待するには緊張感が高すぎた。『ステージ用に豚の生首を10個用意せよ』とテレックスしてきたという話も冗談ではなさそうだ。

「ボクのステージは、いつもたったひとりでシンプルに行なわれるんだ。音楽はすべて自分で作ったものだから、わざわざステージでそれを再現するためのバンドを組むのもシンドイしね。ボクは歌うことだけに集中したいから、テープを使わざるを得ないんだ。

ステージ前にフィルムを上映するのは、観客にショックを与えて、ボクの音楽に直面させるためなんだ。ボクがこれからやるのはエントーティンメントではありませんよという



意味でね。ただ、ボクはあのホラー・フィルムはとつてもフアンードと思うし、見るたびに笑っちゃうよ。

ボクの音楽に、ああいうSM的要素があるか、といわれれば答えはイエス。肉体的に自分の体を痛めつけるというレベルではないけれど、もっとメンタルなレベルでね。ボクは、自己暴露的なステージを行ない、公衆の面前で自己分析しているんだから、これはマジビズムには違いないと思う。

といっても、決してネガティブな表現をしているとは思わないんだ。ボク自身のネガティブな面を自分から切り離しドキュメンタリーにして消化しようとするのは、勇カンでボ



ジティブな行為だと思おうね。

音楽面で注目されるのはとても嬉しいけど、特別に音楽的な素養があるわけではない。サンプリング・マシンとしてはフェアライトを使っただけ、それより生の音を使う方が多い。まずリズムマシンに合わせてガイドボーカルの音を作っておいて、それに合わせているんパーカッションや、身のまわりのモノなどをたたき音を重ねてゆくんだ。ま、人間リズムマシンみたいなんだよ」

撮影 川本満雄

狂気を表現する人ほど、狂気から最も遠いクールな判断力を持っている(じゃないと本当のクレイジーになっちゃうもんね)というお話でした。